パリ「北斎」展 大盛況で幕

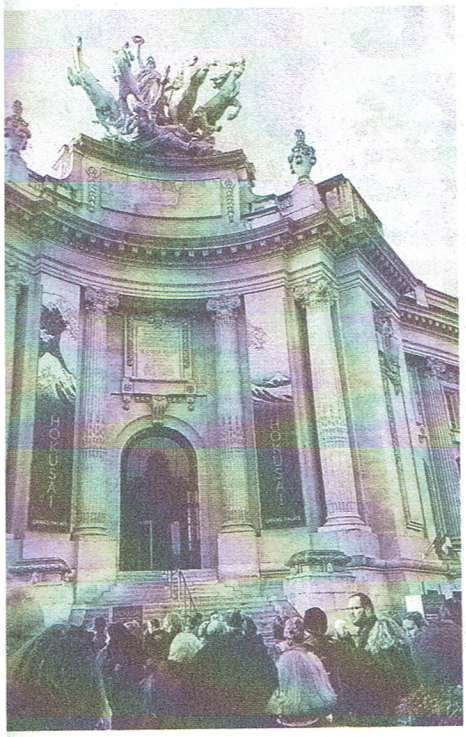
寄稿

画業探究 新たな一歩

年代順に作品一望

美術評論家
木下 長宏

きのした・ながひろ
39年滋賀県生まれ、元横浜国立大教授。私塾「土曜の午後のＡＢＣ」を横浜で開設。著書に「ゴッホ〈自画像〉紀行」「ゴッホ　闘う画家」「岡倉天心」など。



「北斎」展が開かれ、入場待ちの長い行列ができたフランス国立グランパレ美術館前＝パリ、1月17日（筆者撮影）

昨年10月1日から今年1月18日まで、パリのフランス国立グランパレ美術館で開かれていた過去最大規模の「北斎」展が幕を閉じた。総入場者数は約36万人。会場前にはいつも入場待ちの長い行列ができていた。

会場内の人数を3千人に制限していたためなのだが、土日祝日、とくに最終日は、あまりの長蛇の列に、4千人に拡大したそうだ。展覧会のコーディネーター、植木二葉さんは「他の展覧会ではふつう、この3千人は1時間で回転するのだが、北斎展は、誰もが2時間くらいかけて見ていた」と話す。

世界でもいち早く葛飾北斎（1760～1849年）を評価した歴史を持つフランスだ。現代の美術愛好家の関心と興味を大いに誘ったのだろう。これまでは日本がフランスに作品を貸し出す美術展の管理運営費は、だいたい日本側が引き受けてきたものだが、今回はフランス側が主に負担した点でも、同展にかけたフランスの当事者の意気込みが伝わる。

会場では、まず、フランスから起こったジャポニスムが北斎をどんなふうに学んだか（「北斎とフランス」）の展示からはじまり、そこから一転、北斎の作品が「春朗時代」「宗理時代」「葛飾北斎時代」「戴斗時代」「為一時代」「画狂老人卍時代」と制作年代順に展示されていた。

そのうち「北斎漫画」は特別に1室が与えられて、全15編を、各編3部ずつ、縦に並べて、いろいろなページを見せるよう工夫していた。版本や刷り物の展示も、ケースを低く設け、車いすでも無理なく見られる配慮もしていた。会場全体を黒のトーンで統一し、白い紙の作品が浮かび上がる演出も効果的だった。

したいと考えたようだが、監修者の永田生慈さん（島根県・葛飾北斎美術館館長）が断固として制作年代順の展示を主張したという。それが、この展覧会を画期的な北斎展にしていた。

北斎はとても有名だが、まだ全集すら完成していない奥深い人物である。日本でも多くの北斎展が開かれてきたが、どこかのコレクションや、彼の画業の一部を特集した展覧会が多く、その全容を捉えようとする企画はなかなかできなかった。今回のグランパレ展では会期を2回に分け、総数700点を超える作品が年代順に展示され、それぞれの時代にどんな仕事をしたか一望できた。

北斎といえば、生涯に90回以上も引っ越しをしたとか、こたつ布団をかぶって絵を描きまくったとか、奇談の多い画家だが、どんなに有名になっても、徹底して最下層の庶民の生き方を変えなかった。画号を変えるとともに画風も変え、しかも「北斎」としかいいようのないスタイルを貫いた。

彼の変化しながら変わらない生き方を、画業から読み解くこと。これこそ現代に向けられた課題ではないか。グランパレでの展覧会は、そんな

旬

大学院を出てけない。奨学金借金の山だけがんな自身の苦境に、大学の無償評論を執筆した賃金を」（新評した東北芸術工勤講師、栗原康ものを考える人門のアナキズム出会いは高校をサボって読ト大杉栄の評論は社会的な自我られて身動きがる。それを脱ぎが大事だと大杉ボってもいいじう解放感があっ早稲田大と同

「言葉の流れと
ら力の知。じな
を持って行進する市民ら＝2014年6月（ＡＰ＝共同）